
使命感が煙の中に

浅川太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

使命感が煙の中に

【Nコード】

N6366Z

【作者名】

浅川太郎

【あらすじ】

1980年の師走、僕はメジャーデビュー寸前と、予感してたのだが

（前書き）

少し長いですが、「モノ書き」を目指す方々へのメッセージは込めた積りです。

30歳になる前に「モノ書き」になる。

そして小説もこなし、35で直木賞をとり、若者に支持される作家になる

後者は直木三十五にかけた冗談ではあっても、前者は真剣だった。

1980年、夏。無名だった松村友一が情熱出版からプロレスの本を出した。こんな切り口もあるのかと新鮮だった。

特に出版社にコネがあるわけでもなく、個性的な作品で、例えば情熱出版からデビューするのもテだなあと考えた。

タイトルは、どうしよう？

『私、夜の女性の味方です』は、どうだろう。そしてサブタイトルは、向こうを張って、「毎晩8時、ピンサロ理論」

言わずもがなだが、ピンクサロンをピンサロと称していた。

。 当時はまだセクキャバなる言葉はなかった、

芥川龍之介の言葉に、「僕は不幸にも知っている。時には嘘でしか語られない真実のあることを」とある。一般には、小説などの虚構によって真実が語られると文芸評論されるのだが、それは三流評論であろう。

なぜ芥川は「不幸にも」と断ったのか。

当時、大衆キャバレーが隆盛で、夜ともなれば都会の街の辻々にネオンサインが輝いていた。

実は学生時代から、そのような場所にはよく通っていた。

理由は簡単である。

工学部の、ちよつとややこしい学科に在籍してた都合上、高3以来、周囲に女性がいなかったのだ。

また、黒岩重吾の小説も愛読し、頭の中には銀座や北新地のヒロインが何人も住んでいたようなもので、そういった場所に入出入りすることへの抵抗感は全くなかった。

平成の現在セクキャバには、女性従業員も二十歳前後であろうが、昭和の昔は、もう少し高齢の女性がメインで働いてらっしゃった。生保レディを辞めてキャバレー勤務というコースもあったのではない。現在はコースが逆になってるのかもしれない。

何が言いたかったかというと、高齢の女性で、彼女らはいろんなことを背負っていらっしゃったので、こちらは遊びに行った積りなんだが、こちらにも哀しくなり、ホステスさんも悲しくなるようなシーンが、少なくとも僕には圧倒的に多かった。

ホステスさんは、背負ってらっしゃるものが重く、本を読む習慣のまったくない方もいた。

そんな彼女達の客への口癖は、

「よく言うよう!」

「負けそつ!」

「ずいぶんじゃんつ」

頭文字がヨマズ、となってる。

そんな洒落なんかはともかくも、遊びに行ったのに哀しくなるのは、そこに不可避免的に虚構が存在するからではないか。

そのあたりの企画（大嫌いな言葉だが、出版の前には「企画書」が必要）を電話で敬愛する作家、吉行淳之介さんに伝えると、「いいじゃない。それは本になるね」と言ってくださった。

吉行さんとは折につけ電話でお話する機会があり、お亡くなりになる前は特にいろんなことを語った思い出がある。機会があれば短編にしたい。

僕はハガキに、第二の松村友一になりたいです、タイトルも決めてあります、と書き、情熱出版に送った。

投函したのは11月だったように覚えている。

どんな返事が来るのかと期待してる最中の12月。

テレビ受像機に関係する仕事であったため、会社の仕事部屋にテレビが一台置いてあり、たまには独りで放送を見ることもあった。夕刻だったか、たまたま点けたテレビでジョン・レノンが撃たれたという事件が報道されていた。

いま思い出しても、人生最大の沈鬱な日であったと断言できる。

理由なんてどこにもなかったが直感的に、まともな報道にはなり得ないと思った。

その時すでに相当な洋楽ファンであったが、テレビ局の報道マンの

年齢層にはビートルズ、なかでもジョン・レノンをまともにとりあげるのは無理だと直感したのかもしれない。
僕の直感は当たった。

事件の翌日か翌々日、仕事から帰ってチューナーをFM東京に合わせると、DJ、茶渋洋三郎 は言葉少なめに、沈痛に、ジョン・レノンの曲を連続して流した。

たしか茶渋洋三郎は、その何カ月か前、ジョンの新作、『ダブル・ファンタジー』を紹介し、僕は、ジョンの曲だけをオープンリールに録音していた。

その夜、立て続けに流された曲に『Woman is the nigger of the world』が含まれ、なおかつ、語りを極端にセーブしたセンスには脱帽した。

茶渋はまだ洋楽雑誌を刊行してなかったと記憶する。

僕は本に載せてもらうとか、そんな邪念(？)もなく、『ジョン・レノン、かく語りき』という、架空の対談を原稿用紙に書いた。12月中旬の関東、手をガチガチ凍らせての執筆だった。

先ほど、邪念はないと言ったが、「モノ書き」の切っ掛けになればとは思った。実際、洋楽レコードにはライナー・ノーツがあるのが普通であり、

茶渋洋三郎のノーツも読んだことがあり、洋楽評論家、DJという仕事も魅力的に思った。繰り返すが、そんなことより、僕は僕のジョン・レノンを描きたかったのである。

寒さのせいでミミズ字ではあったが3日で原稿を仕上げ、茶渋に電話し、先日のFMの番組に感銘を受けたことを伝え、原稿を書いたのだから読んでいただけるものか問うた。

以外に茶洪は快諾してくれた。

僕は、僕の目の前に広がるチャンスを意識した。

「ピンサロ理論」の著者としてデビューする僕。

おそらく、文芸方面の仕事も、この線から着手することになるう。

ジョン・レノン評論家から始まり、洋楽の解説も可能性がでてきた。

茶洪洋三郎との会談（？）の前に、もうひとつ、伝奇ロマンとでもいうべき長編小説の構想も、実はあった。

ジョン・レノンの年表は、実に覚え易いのだ。

1940年に生まれ、1960年にビートルズを結成し、1970年に解散し、1980年に殺される。

世界史の年表も当時手もとにあり、詳細にそれを読んでいた時である。

小学校の頃、1894年、日清戦争、1904年、日露戦争、1914年、第一次世界大戦と、十年おきにあった戦争という知識はあった。

そんな視線で、冗談で、1945年、1955年、1965年、1975年に起きたことを並べると、日本が息苦しくなるほど痛めつけられていることが想定された。

次に来るのが1985年、この年も日本は厳しい選択を強いられるはずだ。

世界史を動かしていく闇の勢力、十年おきに次の十年のスキームを決める秘密の会議、その事実には普通の、社会人になったばかりの若者が気づき、どうしたものかと悩みながら実家に帰る。すると母から突然、「お前には、タネ違いの兄がいて、外国にいる」と告げられる。兄は実は諜報工作員だった。

と、構想は出来上がり、チャプター毎にあら筋を書き、第13章では殺人事件も起こった。
このような伝奇ロマン　タイトルは『大日本帝国の崩壊』とした。

そんな腹案（鳩山以来、笑える単語である）もありながら、僕は茶
渋洋三郎と会う約束となった。

原宿で待ち合わせ、茶渋が車が来て、助手席に乗った。
当然ながら、有名人とアポして会うなど、はじめての経験である。

初対面の挨拶をし、ずっと放送を聞いてましたと伝え、電話でも申し
ましたよう、《寡黙の雄弁》とでも言うべきジョン・レノン特集
には感銘しましたと言った。

茶渋は、君の原稿をはやく読みたいね、と言って運転した。
どうやら茶渋の事務所に行くらしい。

いつも放送では、このグループはいいと紹介してらっしゃいますけ
ど、本当のところ、どのグループがお好きなんですか？ゼツペリン
ですか、と問うと、茶渋は、今はレゲエだね。レゲエはいいですよ、
と言う。

事務所はまだ遠いらしく、音楽に関係のない話もいかなあと思い、
「僕はプロレスも好きで毎週金曜は見てるんですけど、茶渋さんは
どうですか？」と聞いた。

茶渋は「プロレス？そんなもんは見ないよ」と、軽蔑を顔にした。
ヒトには好き嫌いのジャンルがある。それは知っている。だが、侮
蔑されても仕方ないプロレスで松村友一はメジャーデビューしたの
も事実。

また後年知ったことだが、茶浜の側のライターに、ビートルズについての特論や、衛星放送であったビートルズ特番のメインの司会をやった南田は、熱烈なプロレスファンと知って驚いた。

ライターとして南田が採用されるかどうかの面接があったと仮定して、そこではプロレスの話題は出なかったものであろうか？

プロレスのことを書いて作家になった松村。音楽業界のライターとなり、プロレスも語った南田。プロレスの「プ」の字を言って軽んじられた僕。

今でも不思議に思う。

だが、互いに無口ではあったが、茶浜の事務所に着くまでの数分間、僕はメジャーデビューが秒読みなんだと確信していた。

よく映画である、最初は敵だった二人が、ある出来事で急速に親しくなるパターン。そうさ、プロレスの話題なんて捨て駒のひとつさ。彼の事務所で、彼は僕を認めるはずである。

なんて夢みて、誰もいない、茶浜の事務所に入った。

「早速だけど、原稿、見せてくれる？」

音楽について雑談をして、原稿を渡し、事務所を出る、そんな順序かなあと思っていた。

目の前で読まれることは、たぶんなかりと予想していた。

ならば、僕の目の前で、彼の顔色が輝き、「君みたいなライター、待ち望んでいたんだ。いったい、今までどこにいたんだ！」みたいな台詞を聞くはずだ

「汚ない字ですが、読めなかったら言うてください」

茶渋は、ひつたくるように ひつたくるように、とはいいい表現だ
だ 原稿をとり上げ、食い入るように多少声を出しながら読んだ。

五分か、十分か。

読めなかった字は幸い、なかったようだ。

茶渋は読み終え、期待外れを隠しもせず、こう言った。

「んー。ジョン・レノンとの架空の対談ねえ。 なんか構図が簡単なんだよね。もう少し、違った視線からジョンを描いてくれてると思ったんだけど」

「もちろん、そんな作品だって書けますよ、きっと。 だけど事件が起こってまだ一週間足らず。 僕もまだ混乱してます。 茶渋さんだってそうでしょう？」

「ま、とにかく、こういった単純な原稿ではねえ」

お時間いただいて申し訳ないと詫びて、事務所を出た。

こんなに、それこそ簡単に断られてしまうのか。

簡単な原稿、簡単に断られる、の巻。

自宅に戻り、次の作戦を考えた。

心の中で、月刊『無礼小僧』がちらついていた。

外国の金髪美女のヌードグラビアもさることながら、固い読み物も掲載されていることは承知していた。

時には、新聞には載せられない、だが意義深い、政治的記事も掲載されることもあるし、『無礼小僧』からのデビューだって悪くない。

むしろ望むところだ。

翌日、地図を頼りに出版元の英知社に急いだ。前もって電話は入れてあったのだが、受付嬢に来意を告げると、来客ソファに座るように言われ、程なく編集長自ら来ていただいた。長坂さんと名刺も頂戴した。

重厚な中年。若い頃は随分モテたに違いない。

「ああ、貴方でしたか。

いやね先週ドイツから帰ってきたばかりでしてね、今、駄文書いてたんですよ」

『駄文』ねえ。さすがカッコいいなあ。やはり出版社の編集長ともなれば違うね。僕も流行作家になったら、『駄文』という単語使わせてもらおうと思った。

「ええ、ジョン・レノンがあんなことになり、こんな原稿を書きたくて抑えきれなくなりまして」

「ほう」

僕は原稿を差し出した。

編集長は原稿の表紙を見てテーブルの横に置き、「あとで必ず拝見します」と言った。

できればプロの作家になりたい旨を伝えた。

編集長は僕が最初に差し出した、一部上場の弱電メーカーの名刺にチラと視線を送り、「立派なところにお勤めだ。

プロの作家となるとフリーランサーってことになる。そんなにちゃんとした会社に勤めてらっしゃるんなら、お続けなさったほうがいいかと思いますが」と、にこにこしながら言う。

「ええ。それはもう、充分に考えた挙げ句の結論なんです」 それ

から続けた。

「とにかく、原稿を読んでください。それからまたお返事いただければ嬉しいです」

「はい、それは」

あまり長居もご迷惑であろう。

おいとましたいと告げると、編集長は受付嬢に合図し、月刊『無礼小僧』を持ってこさせた。こらは今日発売になる『無礼小僧』

です。よろしければひとつお持ちください。私の紀行文と、それはどうでもいいんですけど、ジョン・レノンにアメリカ本社『無礼小僧』がインタビューした記事の第一弾が載っている。お好きなんでしょう？

「あ、はい、ありがとうございます」

何か巨大な歯車が動いたかもしれないという感覚がした。

国内有数の若者向け月刊誌の編集長に、こんなに温かく受け入れられて、偶然にもジョン・レノンへのインタビュー記事が載り、折しもその発売日に僕が英知社を訪れた。

好意をもって受け入れられたようだし、洋楽の評論、解説、ちよつとしたエッセイなど書いてくれ、などと言われるのではないか。

夢にまで見たメジャーデビューもすぐそこまで来ているのではないか。独り暮らしのアパートに戻り、さ、どうしたものかと考えた。

当時、胸の中に『大日本帝国の崩壊』の構想もあったこともあり、資料として本を大量に購入したり、ない場合は注文してた書店があった。

住んでいた町にあった小さな書店だったが、そこを独りで切り盛りしてた僕と同年輩の美人の店員がいて、一方的であったのだろうが、好きになっていた。

「モノ書き」志望であることは伝えていた。原稿用紙をよく買ってもいたからである。

なんだか、すべての夢が同時に叶ったら、すなわち、ホステス物、文芸単行本が情熱出版から、ジョン・レノン関連で洋楽物の仕事がある『無礼小僧』の英知社から舞い込み、『大日本帝国の崩壊』も、どうにか形をとり、独身ということは聞いていた、その本屋の店員とも結婚できたなら、どんなにか素晴らしい人生になっていくんだろうと、僕は内心微笑んでいた。

それこそ、茶渋に断られたことが最もラッキーだったのかもしれない。

四つの希望がすべて叶うなんてことがあり得ない程度の分別というか、そこまで自分がラッキーな男とも思っていないかった。四つのうちの、たぶん一つくらいが実現するのではないか。それでも念願のメジャーデビューは果たせる。それが果たせたら、あとは羽ばたく自信があった。僕の文章で文壇を自在に泳ぎまわる自信

部屋に戻り、編集長にいただいた『無礼小僧』をさっそく開けてジョン・レノンのインタビュー記事を読んだ。

驚いた。あんなに驚いたことはなかった。

僕が書いた仮想の対談と、瓜二つ、は大袈裟にしても、相当な部分、重なっていたのだ。

茶渋に「勝った」 と思った。

僕には、ジョン・レノンになりきる能力があったのだ。

編集長もすぐに気づくはずである インタビュー記事の内容を予言してたんだから。

編集長からの返事が待ち遠しい。

翌週、情熱出版からハガキが来て、四ツ谷に出てきませんか、食事でもどうですかとあった。

ジングルベルの流れる四ツ谷のレストランで、松村友一を担当したという西野編集員に会った。

ホステス物をできれば単行本で出せないものか問うた。吉行さんも賛同してゐることは伏せた。

『無礼小僧』とも進めてゐる話があることを伝えた。

英知社からデビューは、たぶん無理と思つてると伝えた。

長編、伝記ロマンの構想もあると伝えた。

その日は、顔合わせみたいなことで別れた。帰りに、ちょっと会社に来ないかと言われ、情熱出版に立ち寄った。そこで西野さんに、自分が担当しているという椎倉雅人の『哀愁列車』を手渡された。西野さんは続けて、「こんな軽いものが私の専門だったんですが、君みたいな硬派っぽいものも手掛けたくもあつてさ」

「あ、はい」こんどは、文壇という巨大な歯車が僕をからめ、確実に回っていく、そんな予感がした。

もともと運がいいとは思っていなかった。むしろ悪いほうとの自覚はあった。

それが、ようやく認められてきつつある

だが、この段階で焦らぬことだ。

まだ有頂天にはなるな。

ここを耐えて慎重にやるのだ。

自宅に帰る途中、いつもの書店に寄り、数冊の本を求めた。
例の彼女に言われた。

「何かいいことでも、あったのかしら？」

「どうして？」

「なんだか貴方、明るくなったように思っ

「いつもは、どうだったのよ」

「なんか、思いつめたような顔をしてた」

「そう？実は今度、プロの作家になれるかもしれないんだ」「まあ、よかったじゃない。どんなこと書くの？戦争もの」

その店で第二次世界大戦の資料ということで大量の本を1、2冊づつではあったのだが、注文していたのである。

「違うよ。ジョン・レノンについて書くことになるかもしれない」

まあ、素晴らしいことね、とでも言うのかなあと期待していたのだが、彼女は違ったことを言った。

「あら、そちらの方面だったんだ。これからの時代、売れる、ということで考えたら私、絶対コンピュータ関係の本だと思うんだ！」

「そちら方面、僕、からきしなんだ」

同年輩の美人だし、賢い女性ということは初めから判っていたし、

強烈に彼女を欲しいと思った。

彼女と結婚し、タッグを組んだら、これから付き合うことになるであろう数々の出版社とも彼女なら《秘書》として彼らと渡り合えるはずだ。

クリスマスが目前だったが、これは将来、自叙伝を書き記すことがあれば、「デビュー直前の慌ただしさ」とてもなろうかと独り、悦に入った。

彼女にデートを申し込みたい気持ちは沸き上がっていたが、もう少し話が具体的になってからにしようと思制した。

その頃、クリスマスといって男女がデートしなくては、という感覚はまだ強くはなかったはずである。

年末年始、ホステス物の原稿を書いていた。

いよいよの年末、一度だけ編集長に電話をかけてみた。忘れもしない、多忙な最中の電話を詰ることもなく、長坂編集長は、

「君の書く文章には、何というか、迫力があるねえ」と、おっしゃっていただいた。

恥ずかしい話で、ここに書くのも躊躇うのだが、人生最初で最後の嬉し泣きをした。

相当に僕は、約束された、そう思った。

その前後か、吉行さんと電話で話した。

「松村友一さんの『プロレスの味方』にフランス料理の話がありましてね、その主人が、死ぬまでに一回でいいから、そこで彼が提供するサービスを受けてみたい、と言ったんですって。すごいサー

ビスもあつたものですね」

後年、吉行さんのエッセイの中、相手へのプレゼントのランクが書いてあり、《高価と、受け取ってすぐに判るプレゼント》《さりげないが、高価なもの》等と分類なさつて、さすがに《感覚の鏡》と称される吉行さんだと感銘したものだ、その日吉行さんは、「ああ、松村君ねえ そんなこと、書いてましたか」と、おっしゃったことを覚えている。

実はその頃、松村友一が吉行さんの担当の編集員を務めていたことがあつたことなど全く知らなかった。

だから、「プロレス本」にまで目を通してらっしゃるのかなあ、とか、「松村君」との呼称に少々違和感があつたが、次の話題に移つた。

ずっと後、お二人の仕事上の関係を知つた時には驚いた。

純文学の方面で心の師と仰ぐ吉行さんと、力道山の頃からプロレスだけは街頭テレビで、そして家のテレビで見続け、はじめてそのプロレスを真つ向から本を出したのが松村友一で、僕はそれを出版した情熱出版から本を出す可能性もあつた。

先を急ごう。

編集長には、『大日本帝国の崩壊』のアウトラインと、チャプター毎の展開を郵送した。

意識下の意識で、硬派の内容への志向もあるので、ポピュラー音楽だけではなく、守備範囲の広いジャーナリストになりたいと伝えたかったのかもしれない。

年は明けても、変化はなかった。

成人式の前後、情熱出版の西野さんから連絡があり、一度、四ッ谷で飲もうかと誘われた。

明るく商談をしよう、という口調ではなかったが、応じた。

その夜、焼き鳥で飲みながら、「やはり、最初からいきなり一冊の本、というのは難しいねえ」

彼は続けた。

「実は松村さんも、最初ウチが毎月刊行してる『情熱ジャーナル』に書いてもらってたんだ」
と小冊子を渡してくれた。

確かに松村友一のページがあり、しかもビートルズのことを導入としてる記事だった。

ビートルズ・マニアと呼ばれた少女達は自らの直感でビートルズを選びとり、泣きじゃくりながら声援したのであって、往々にして天才を最初に判断し、認めるのは無垢な少女達である、と論じてあった。

斜めにその部分を読み、焼き鳥屋の少し暗い店内で西野さんに渡されたのだが、不吉な前兆のように思えて仕方がなかった。

大袈裟に響くかもしれないが、『創造の神』が僕をからかっているとは思えない符合である。

吉行さんと松村友一の符合までは笑って受けとめることができた。

だが、松村がビートルズを語り、それをこんな形で読む、なんて、何かに愚弄されてるのではないか。黒ネズミがケージの中でぐるぐる針金の輪を回してるだけ

だが、あくまでも皮膚感覚とでも言うのだろうか、そんなレベルで黒ネズミが浮かんただけで、実際の僕はチャレンジングな態度を続

けなくてはならないだろう。

ええ、解ってます。そのような機会を与えてくださっただけでも嬉しいです。これを読ませていただいて、これに載せるのに足る文章を書いてきます、と精一杯明るく応えた。

「で、どう？『無礼小僧』のほうは」

はあ、まだ何とも言ってきませんね。年末年始で忙しいんですよ。

例え、情熱出版の話が流れても、「迫力がある」と太鼓判（？）を押してくれた英知社なら、ジョン・レノンのインタビュー記事がある程度予知してたことも知ってるはずで、何か仕事をする機会があると心の中で思ってたかどうか

もしもそのように思ってた、僕の態度、顔色、口調に現れたかどうか、何十年経った今でも判然としない。とにかく、松村のビートルズの記事を読んで、暗い気分になったことだけは覚えている。

別れ際に彼は言った。

「英知社みたいに大きな会社になると、口でいいように言うなんてことあるんですから、気をつけてくださいよ」

ええ、それは判っております。

アパートに戻り、ホステス物の原稿は一旦片付けた。

西野さんに言われるまでもなく、繰り返すが僕は自分を決してラッキーマンな人間ではないことは解っていたし、英知社から面接（？）したいと言ってこない限り、慎重な姿勢をとり続けざるを得なかった。ジョン・レノンについての原稿なら、いつでも書けるのだが特に用

命はないし、『大日本帝国の崩壊』

のあら筋はだいたいはできていたのだが、ディテイルのためにGHQの研究や、第二次世界大戦の特攻隊の背景も勉強する必要があった。

前者のために作家のA、後者のためには野坂昭如さんに電話をしなければならなかった。

その作品は英霊に捧げる意図もあったし、歴史を真摯にとらえれば、日本の置かれた立場がみえてくるはずだとの《使命感》を勝手ながらではあるが秘めてた積りである。

Aと、その時すでに亡くなっていた作家のことについて聞きたいことを聞いた。

僕はAのファンでもあったのだが、その表明はしなかった。

Aは、僕が、その亡くなった作家の愛読書かと誤解したようだった。

電話を切る直前のAの語り口からそのように判ったのだが、特に否定はしなかった。

野坂さんとは、次のような会話となった。

「野坂さん、どこかで特攻隊員が直前、大体は酒だったんでしょが、覚醒剤を打たれたこともあったと書いておられましたか、あれは本当にあったんでしょうか？」

僕は野坂さんの本もかなり読んでいた。野坂さんは、あの独特の口調で、

「いや。そのように聞いたこともありませんが、必ずしも真実ではないかもしれません」

謝意を示し、電話を置いた。

その他、各方面を調査するためもあり、会社には健康不安からの1ヶ月の休暇をもらい、九州に飛んだ。

飛ぶ前日の夜、なかなか寝付けなかった。

《柔》はピンサロやポピュラー音楽から、《硬》は国際政治まで、多くの本を作っていく道の入り口に立てたのかもしれない。戦う相手は世界かもしれない。

吉行さんや野坂さんとの交流も始まるのかもしれない。

とにかく、本屋の彼女と結婚もしたかった。

凜とした興奮が覚めず、ジェファースン・スターシップのレコード、
「freedom at point zero」を聞いた。

荒野でジェーンというセミノールの女が踊ってる。

だが彼女は囚われていて、僕は彼女を救う戦闘部隊の一員だった。

暗雲が垂れ込めた中での激しい戦闘。

戦いに疲れた夕暮れ。

そして最後、救出した彼女や仲間と「よかった！よかった！（オーライ）」

と歓喜の涙を泣き合うシーンが脳裏に映り、さ、これからだぞと、自らを鼓舞した。

彼女を、そして日本を救う強烈な使命感

ほとんど寝れないまま朝を迎え、博多に着き、卒業した大学に行ったり、旧友に会ったり、調べものの都合で新聞社に寄ったり、最後に実家に行き、「チャンスか巡ってきたのかもしれない」と母に報

告したら、会社勤めはどうするのかと泣かれた。

関東に戻り、『情熱ジャーナル』に投稿するため、「混迷する世界、原発記事の行方」を書いた。

ちょうどその頃、広瀬隆さんという聞きなれない方がジック出版から『東京に原発を！』という、当時、ちょっと有名になった本を出され、広瀬さんを囲む会とでもいうものが中央線界隈で開催されて、参加したこともあった。

食物連鎖の話なんか恐怖だったし、電力会社その他から嫌がらせを受けながら、ゲリラ戦的な展開を図る広瀬さんを支持していた。

マンションの小さな一室での会合で参加者は十人程度であったが、広瀬さんは原発の窮状を訴え、阻止すべきと持論を展開なさっていた。

質疑応答で、誰かが広瀬さんご自身の身の安全を訝った。

広瀬さんは、尾行されていることは察知しておっしゃった。

僕は、世界でABCウエポン（atomic、biological、chemical の頭文字）

で、どうして広瀬さんはAに集中なさってるのかと質問した。

広瀬さんは、影響が比べものにならないくらい被害が大きいのです、と答えてくださった。

そのような状況を踏まえ、さらに、原発の新聞記事が揉み消されている事実もあり、その点を暴露する記事を情熱出版には寄稿しようと考えた。

現在の僕が白状するのだけれど、地方版の新聞の一面と東京、最終版のそれは解離していくのが通常であり、必ずしも「隠蔽」の意図が新聞社にあるとは限らないことは知っている。

原発事故の恐怖は、実は広瀬さんよりはやく、野坂さんが『アルファベット』という作品でとりあげたり、『野坂昭如のオールナイト日本』でも発言なさってたから、もともと興味はあった。それらの危機が実現してしまうとは夢にも思わず、だが、阻止はせねばなるまい、とのスタンスだった

年は明けたが、英知社からの連絡も跡絶えたままで都合、1ヶ月以上も経ったこととなる。恐る恐るではあるが編集長に電話してみた。

編集長は僕に対して激怒してた。

その理由の詳細は書きづらい。

万が一、この作品をリニューアルするような機会があれば、その詳細を書いてみたくもある。

ヒントとしては、『大日本帝国の崩壊』のために、複数の作家に電話をしたのだが、A側から歪曲された情報が編集長に伝えられた経緯があったようだ。

僕は編集長に、誤解であると伝えたのだが、聞きいれられなかった。

《大日本》に関するアウトラインについては、英知社の親会社になる習学出版の美濃部さんという編集員に渡してあるから、連絡して会うように言われた。

日本が崩壊するんじゃない。

僕のほうが崩壊しそうになった。

週を置かず、美濃部さんに会うことにした。

あくまでも眼光鋭く、実績も伴う野武士　　そんな風情だった。
すでに相当に老齢であつた。

輩出したり、手掛けた作家も数知れずとの雰囲気、全くの素人の僕にもひしひしと伝わってきた。

おそらく、黒岩さんとか筒井さんとも交友関係があるのではないかな。近くの喫茶店に行き、以下の会話となつた。

君は小説というものを、どんなものだと思得てる？
「はあ。いろいろと登場人物を考え、プロットを練つたり」

そんなんじゃないよ。登場人物が死ぬんだよ。先ず、人物を描く。いいね。それから、また別の人物を描く。
後は、彼らにプロットは任せなきゃ。黒岩重吾の作品も読んでるみたいだね？君の自己紹介の文章も読ませてもらった。

「ええ。学生の頃から読んでます」

そうか。黒岩さんだつて、君みたいな小説の書き方はしない。
登場人物が、勝手に、言葉が悪いかな？

自由に羽ばたいていつて、彼ら自身が物語を紡いでいく、それが小説つてもんさ。聞くと君は、随分いい会社に勤めているそうだね？
「はあ」

悪いことは言わん。会社勤務を続けたまえ。ああ、譲り受けた原稿、返すから。君は小説家になろうとか考えちゃ駄目だ。

原稿を差し出され、受け取り、美濃部さんはレジで支払いを済ませ、

年に似合わぬ健脚で立ち去っていった。

返す言葉はなかった。

違う　　こう言いたかった。

小説には色んな書き方があっていいのではないですか？最後の一文を決めて、そこになだれこむみたいな書き方だってあってもいいし、アウトラインを決めて、その中で登場人物がもがき苦しむような小よな説の書き方があってもいいのではないか。

第一、黒岩さんの書き方は、連載する長編小説の書き方であって、まだ作家でもない僕に適用するには無理があるのではないか

また一方で、僕はごく普通の社会人であり、これも断り方の方便で、「お前には才能がないから諦めろ」と言う代わりに言ったのかも知れない。

考えにくいことだが、編集長から、「トラブルを起こす可能性のある男だから、理由は何でも構わない、二度と我々に近づかないよう」などと伝えられた、とか。

お察しのように、情熱出版の西野さんからは、君の書いたものに、もう少し具体例なり裏付けがあつたら『ジャーナル』に載せてもいいんだが、正直言つて、このまま載せることはできかねる、と言われた。

あれだけ取材するだけでも結構大変だったのに、どうすればいいんですか、取材費だつてかかるのに、とも言いたかったが、わかりました、とだけ伝えた。

本屋さんの彼女とは、一回デートした。
僕のことは好きなんだが、自分のことを待ってる男性がいる、と言った。

将来、この女性のことは書くかもしれない。書かないかも、しれない。

以下、色んなイフ（もしも）を考えてみたい。

ジョン・レノンの事件がなかったらと考える。

間違いなく情熱出版とだけ付き合っただけである。ホステス物の原稿は読んでもらえたかどうかは判らない。

やはり、『ジャーナル』に載ってからとの手順となり、それから実力がないとみなされ、断られた公算が高いだろうか。

『無礼小僧』はどうであつたろうか。

長坂編集長の部下に、洋楽に詳しい編集員がいて、長坂がその部下に原稿を渡し、有能かどうか判断し、いけそうだったら何か洋楽物について書けるようだったら書かせればいいし、駄目なら、後は任せる、みたいな流れでもっと早くに連絡をもらっていれば、違う展開があつたかもしれない。

心の片隅には、阿久悠さんと沢田研二のタッグみたいな関係に憧れ、ちょうどピアニストとしても作曲としても実力があつたと個人的には評価してたが、泣かず飛ばずの状態の続いた原田慎二君に、先ずは作詞をして、さらにはプロデュースするとかの夢もないではなかった。

前にも書いたが、何らかの手がかりでデビューしたら、後は文壇、音楽業界を自由に泳ぎまわる自信は、何故があった。

勿論これらが、絵に描いたような、死んだ子の年を考えるようなことだとは知っている。

結局は、何もチャンスらしいものないまま年を重ねてしまった。

1985年、日本のスキームを変革するような何かが起きる、と予感するところで「大日本帝国の崩壊」は終わらせる積りだった。85年は円高が進んだ年と記憶する。95年には淡路・阪神大震災を経験した。今でも「都市伝説」は好きである。

実は、僕のジョン・レノン物語には続編がある。それはぜひ、いずれは書いてみたい。

ジェファースン・スターシップの「フリーダム」のアルバムLPはCD化されてすぐに買った。

ほとんどのポップスには、聞けばタイムマシンみたいに当時の心情を思いだしたり懐かしがることができるのだが、「フリーダム」だけは聞いてみても何の感興も覚えない。

世界を救うという使命感、彼女を欲しいと思った情熱、メジャーデビュー直前を予感する恍惚と不安とともに熱狂的に聞いたあの夜の自らの、痛々しいまでの愚かさを苦々しく思いだす気分のほうが勝ってしまうのだ。

独り相撲とかピエロとか、そんなレベルではない。

ひたすら僕は、愚かしかったのだ。

約束されてたはずの未来が、一瞬で消えていってしまう絶望。

「モノ書き」としてメジャーデビューを夢みる若い方々に伝えたい。
そんな絶望すら愛せるような心の準備は必要である、と。

（後書き）

書き直す機会があれば、それに応じたくも思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6366z/>

使命感が煙の中に

2011年12月21日12時51分発行